日本語親族名称の前提条件

—テクノニミーとオイコニミー

小島　衛　博士課程前期１年

序論

日本語の親族名称の特徴とはどのようなものであろうか。日本語でも印欧語の一つであるフランス語でも親族名称は年少者に合わせた使い方をすることがあるが、その構造は異なっている。日本語では最年少者に立場を同一化させ、まるで話者が最年少者の視点を持っているかのように話す。対して、フランス語では立場を同一化させずに、あくまで本人の視点から、客観的に最年少者からみた親族名称を使うのである。例として、日本語では子どものいる家庭では、母親が父親に向かって「おとうさん」と呼ぶことや、父親が自分の父親に向かって「おじいさん（本人にとってはおとうさんのはずである）」と呼ぶ。これは最年少者に合わせている。それに対して、フランス語では父親が子どもの前で母親を「Ta mère」と呼ぶことや、自身の父親を「Ton grand-père」と呼ぶことがある。一見、日本語の例とフランス語の例は同じに見えるが、フランス語では日本語にはない所有表現がされていることが指摘できる。この違いによって、日本語では年長者は最年少者に視点を合わせていること、対して、フランス語はあくまで客観的に最年少者からみた親族名称を使っていることが言えるだろう。

年少者に合わせて、親族名称をその年少者の名前と所有表現を伴って用いることをテクノニミーと呼ぶ。フランス語や日本語の年少者に立場を同一化させる親族名称の用い方はテクノニミーではない。フランス語の場合、「Ton père」などと呼ぶことがあるが、子どもの名前を使うことはあまりない。また、鈴木孝夫によると、日本語の場合、年少者に合わせた親族名称を使ってはいるが、そこに隠されているのは〈うちの〉という家族を意味する表現である。つまり、日本語の親族名称は家中心的であるといえるのである。このような日本語の親族名称の使い方を鈴木に倣ってオイコニミーと呼ぶ。

〈うちの〉という語は、発話者が所属する〈家族の〉所有表現である。このオイコニミーが含んでいるとされる〈うちの〉は、一人称複数形所有表現の〈私たちの〉とほぼ同義であると考えることはできないであろうか。本論文では鈴木のオイコニミー概念における〈うちの〉が〈私たちの〉と

いう概念と同義であるか考察し、それを踏まえた上で日本語の親族名称の特徴を探っていく。

本論文はⅢ章構成となる。まずⅠ章では、うえで述べた親族名称の使い方についてより具体例を挙げながら触れる。続くⅡ章では、人類学で用いられるテクノニミーという概念に関連させ、改めて日本語の親族名称の特徴を探求していく。さらにそれらの議論をもとにして、Ⅲ章では結論を出す。

第Ⅰ章　年少者に合わせた親族名称

Ⅰ章では、日本語とフランス語、両方の言語で親族名称が年少者に合わせた使い方があることを示す。その際、お互いの特徴を示し、日本語の親族名称が印欧語の一つであるフランス語とどのように違う使われ方をされているのかを探っていく。

序文で例を示したように、日本語の親族名称には変わった使われ方がある。それは、親族構成員の年長者がまるで、自身が最年少者の視点を持っているかのように親族名称を使うのだ。例えば、祖父母と両親、息子が二人いる家庭内では、子どもの母親が「おじいさんは」と話せば、母親本人の祖父ではなく、子どもにとっての祖父、つまり母親から見て本来は父（または義父）である立場の人物について述べたことになる。また、祖父が家庭内で「お兄ちゃん」と呼びかけると、息子二人のうち兄に呼び掛けたことになる。本来の関係性とは異なる呼び方をしているのである。このような呼びかけ方がされているのは、年長者は最年少者からみた親族名称で家族に呼びかけるためである。

このような呼び方はフランス語にも例はあるのだろうか。序文でも示したため、結果から言うと、使われ方に差はあれど、年長者が年少者に合わせる親族名称の使い方は存在している。例えば母親が子どもに向かって「Ton père」と言うと、これは子どもにとっての父親を示すことになる。また、子どもに「Ta grand-mère」というとこれは子どもにとっての祖母を示すことになる。以上のように年少者に合わせた親族名称の使い方はフラン

ス語にも存在している。

以上の日本語とフランス語の親族名称の使い方を比較、検討してみると、両者には違いがあることが伺える。それは日本語では年長者が年少者に立場を同一化させるのに対し、フランス語ではそのようなことはないということである。これはどういうことかというと、日本語では年少者に合わせた親族名称には年少者の所有表現が付いていない、つまり、フランス語のように「あなたの」すなわち「その子ども」にとっての所有表現が付いていないということである。また、そのような所有表現が言外に含まれているかについては、鈴木孝夫（1973）が以下のように述べている。

> それならば、どのように子供の前で、妻が夫を呼ぶかと言うと、「おまえのパパおそいね」のように言うのだ。〔・・・〕このようにトルコ語では自分を原点としない親族名称を使う時は、必ず「誰の」という原点を明確にするのである。／このようなトルコ語の例から見て、日本語の場合も、「お前の」に相当することばが省略されているのだと考えることができるだろうか。／この解釈は、理屈の上ではともかく、私達日本人の言語直観にはどうもぴったりしないようである。このことは次のような例を見ると一層はっきりする。／私の乗っていた国電山手線が、新宿駅に着いた時のことである。席がガラすきになったと思うや、どっと新しくお客が乗込んできた。私の隣に足早にかけより席を占めた老婦人が、自分の側の座席を掌でたたきながら、「ママここにいらっしゃい」と怒鳴ったものである。すると乗客の中から、赤ん坊を抱いた若い娘が現われて老婦人の側に座った。明らかに、母親が娘をママと呼んだのである。〔・・・〕／私はこの用法を次のように解釈することを提案してきた。妻が子供の前で夫のことに、パパとか「おとうさん」と言及できるのは、彼女が心理的に子供の立場に同調するからである。彼女は、自分自身の立場から見れば夫でしかあり得ない人物を、子供の見地を経由して見直すのである。つまり、彼女は自分が使うパパという自己中心語の原点を、子供に移すのだ。子供から見て、パパと呼べる人だから、彼女からもパパと呼ぶのである。

この際重要なことは、彼女は子供と心理的に同調し、子供の立場に自分の立場を同一化しているという点である。子供の立場、子供の視点へのこの歩みよりを、私は共感的同一化（empathetic identification）と呼んでいる。（p.166-168）

以上のように日本語では年少者に合わせた親族名称には「その子どもの」という意味は含まれていないことがわかる。そして、それはなぜかというと、日本語では親族名称を使うとき、関係性を子どもの立場から見るのである。親族名称というのは本来、指示語的である。指示語については以下の引用で詳しく検討したい。

再び鉛筆の例でこれを説明しよう。私が指さして「これはなんですか」と言った時、相手は「それは鉛筆です」というのが普通である。つまり、全く同じ鉛筆という対象が、私によっては「これ」と呼ばれているのに、相手は「それ」と言うのである。このように「これ」「それ」「あれ」などの指示代名詞は、問題になる同一の対象と、ことばを使う人の関係の違いを反映して変って行く種類のことばなのである。〔・・・〕これらのことばは自己中心語（egocentric particulars）と呼ばれている。／これに対し鉛筆や猫のような普通のことばは、言うなれば社会中心語なのである。〔・・・〕／ところが「わたくし」「あなた」のような人称代名詞も、自己中心語であると言える。「わたくし」とは話しをしている人が、自分を称することばであり、相手が話し出せば、今迄話していた人は「あなた」に変り、今迄の「あなた」が「わたくし」になってしまう。／同じように、親族名称もすべて自己中心語なのである。たとえば、ここに或る男の人がいるとしよう。この人は、自分の子供にとっては父であるが、妻から見れば夫である。またその人の父親から見れば、息子であるというように、彼と親族関係にあるいろいろな人の、異った立場により、同一人物が異った名称で呼ばれるわけである。従って親族関係を広く大きくとればとるほど次々と異った名称で同一人物が呼ばれることになる。（同上 , p.163-165）

指示語的というのは、自分を中心に据え、自己中心的な距離でものを示すことである。例えば、これやあれなどは自分を中心として、最も近くに位置するものをこれ、やや離れた位置にあるものをそれ、そしてより遠くにあるものをあれと呼ぶ。自分を中心とした近さや遠さで名称を決定している。親族名称も本来はそのように（物理的な距離ではないのだが）、自分を中心として、周りとの関係性、その関係性の近さや遠さで名称を決定する。本来は指示語と同様に自己中心語であるはずなのだ。しかし、日本語では子どもを中心に、その子どもからみた関係性で親族名称を使うため、子ども中心語と言うことができるだろう。

対して、フランス語はどうであろうか、フランス語も日本語のように子ども中心語として親族名称を使っているのだろうか。結果から言うと、それは間違いである。なぜなら、フランス語の場合、日本語のように立場の同一化を行わないからである。日本語とフランス語で年少者に合わせた親族名称を使う際に違っていることは、「あなたの」という表現が付くか付かないかであった。フランス語は常に「あなたの」という表現を使う。これによって、特別に立場の同一化を行ってはいないことになる。「子どもの」という表現を含むことによって、あくまで立場は自分で、自分から見た親族名称ではないことを表現しているからである。あくまで、「子どもの」ものであって、自分から見たものでないことを表現しているのだ。日本語のように子ども中心語として親族名称は使わないのである。

第Ⅱ章　テクノニミー

続いて、テクノニミーについて触れたい。テクノニミーとは親族の呼び方の概念である。Ⅰ章であげた親族名称の用い方がテクノニミーと関連しているのかどうかを探りながら、特に日本語の親族名称の使われ方の特徴について探っていきたい。

まずは、テクノニミーの意味について確認したい。テクノニミーとは人類学の用語で、年少者の名前を使って年長の親族を表すことである。清水

芳見はテクノニミーを以下のように記述している。

> つまり、テクノニミーとは、夫婦に子どもが生まれると、それ以後その夫婦は自分の名前では呼ばれなくなり、生まれた子どもの名前を軸にして呼ばれるようになる、という慣行を意味する言葉である。具体例をあげれば、夫婦に太郎という子どもが生まれると、その夫婦はそれ以後習慣的に「太郎のお父さん」、「太郎のお母さん」と呼ばれるようになるのである。日本でもこういう呼び方をすることがないわけではないが、慣行にまではなっていない。（p.14）

テクノニミーとは子供の名前を使って父母の名前を、あるいはその子供にとって年長の親族について言及することである。フランス語でも日本語でも、家庭内でこのような使い方はしないであろう。確かに、学校などで「〇〇君のお母さん」などは聞かないわけではないが、常にその表現だけを使うことはない。フランス語では、家庭内ではせいぜい「Ton」や「Ta」など人称代名詞の所有表現を使って親族関係を表す程度である。このような用法において、鈴木孝夫は以下のように定義している。

> さて、そこで改めて考えて見ると、私たちの誰もは、さまざまな親族関係の束の中に組み込まれている。したがって少なくとも理論的には、ある人が家族をもっている場合、その人のことを私たちは、勝手に選んだ彼の家族成員の誰かしらの名前と、適切な親族関係用語とを組み合せることで呼ぶことが可能なわけである。／したがって、ある1人の男は必然的に誰かの息子であり、同時に別の誰かの兄弟であって、しかも更に別の誰かの父である場合も考えられる。だからTylorによって最初に記述されたテクノニミーとは、実に理論的に考えることのできる、さまざまな親族名称を利用する間接迂言的な呼び方の中の、一つの特殊なタイプに他ならないことが分る。そこで私は異ったタイプの、このような間接的な呼び方すべてを包括するアロニミー（allonymy、ギリシャ語・allos ＝他）という新しい概念を導入すること

にしたい。この概念の中にほかのいろいろなタイプと並んで、テクノニミーも〔一つの下位区分として〕正しく位置づけられることになる。〔・・・〕／私の考えではアロニミーは単なる普通の間接的な呼び方ではなく、ある人が呼ばれる際には、きまってその人の個人名が避けられ、何かしらの親族用語による間接的な方法で呼ばれることが大切な点で、これはまさにTylorやWinickの定義に、ちゃんと含まれているものである。この辺で私の言うアロニミーのやゝ大まかな定義を示すとすれば、それは次のようになる。／「ある人を、その人の家族の誰かとの関係を示すことによっていつも呼ぶ習慣。そしてこれは完全ではないにしても、その人の個人名を示すことなしに行われる。」（1998, p.195-196）

テクノニミーは子供の名前を使って親族関係を表すことだけを示すが、アロニミーはより包括的に間接的な親族関係によって個人があらわされることをさす。先に述べたフランス語の「Ton grand-père」や「Ta mère」の例はアロニミーの範疇に収まるであろう。対して日本語における現実の関係性を無視した「おかあさん」や「おじいさん」の使い方はアロニミーではない。なぜなら、アロニミーとは家族のだれかとの関係を示すことによって呼ぶ習慣であるからである。日本語の上記のような使い方は、所有表現を伴わないことで親族内の誰かとの関係性を示さない（意味としては最年少者にとっての関係性であるのだが）。このような日本語の特殊な用法を鈴木はテクノニミーとアロニミーとは別のものであると述べている。

以上説明したような理由で、私は日本語に見られる他者中心的でかつ子供中心的な親族用語の使い方に対してoikonymy（ギリシャ語・oikos ＝家）という新しい用語を提案する。日本語の場合は家（家族）という概念が決定的な役割を果しているからである。（同上 , p.203）

このように鈴木はテクノニミーやアロニミーとは別のオイコニミーという概念を提案している。ここで定義されたオイコニミーについて、更に鈴木

は詳しく言及する。

> 次のように言う方が、もっと核心に迫れるかも知れない。家族内と言う文脈の中では、日本語の親族用語はもはや相対的な関係詞としてではなく、半ば絶対詞のような働きをしていると。いま述べた見方を支持すると思われる数多くの言語上の証據のうち、〈うちの〉という表現を取上げてみよう。日本人が家の中で「お母さん」と言うとき、それは「私のお母さん」でも「お前のお母さん」でもない「うちのお母さん」の意味なのであって、この「うちの」は明言される必要がないのである。〔この（うちの～）という言い方は、「他人に向って、うちの主人」、「うちの娘」など言う場合のほか、「うちの犬」とか「うちのくるま（庭、冷蔵庫、クーラーなど）」といった人間以外にも見られるものである。〕（同上 , p.203-204）

日本語の年少者中心の、また関係性を無視した親族名称の使い方には〈うちの〉という概念が含まれているというのである。この文脈における〈うちの〉というのは〈家族の〉という意味の〈家の〉と同じかほぼ似たような意味を持つと考えられるであろう。

第Ⅲ章　オイコニミーと一人称複数の所有表現

この〈うちの〉という概念は一人称複数形の所有表現と捉えなおすことができないであろうか。日本語の一人称複数形については以下の定義を示す。

> 一方、１、2 人称の複数形は、それぞれの単数の基幹にほぼ規則的に対応し、-ra、-taci、-domo のような複数標識がこれらの複数形の派生に役立てられている。（松本克己 , p.401）

一般的に日本語における一人称複数形の所有表現は一人称〈私〉に複数標識 -taci をつけて〈私たちの〉ということが多い。以下、本論文中は〈私

たちの〉という語を一人称複数形所有表現の代表として扱う。

さて、改めて〈うちの〉を〈私たちの〉と捉えなおすことができないであろうか。一人称複数形は、その構成員として〈私〉と〈私〉以外の人物が必要である。いわばその〈私〉以外の人物というのは一人称単数〈私〉以外のすべての人物がなりうる。例えば、対話者、二人称の人物を含んでも、発話の場にいない三人称の立場の人物を含んでもよい。同様に〈うちの〉という概念でもその場に、〈うち〉を構成する家族全体がいてもいなくても発話の対象に意味は通じるであろう。

序文で述べたように〈うちの〉という語は私が所属する〈家族の〉所有表現である。その意味において、〈私たちの〉という語の持つ意味と共通する。なぜなら、〈うちの〉という語も〈私〉が所属していることが前提であるからだ。〈うちの〉で他所の過程を表すことはなく、常に〈私〉、すなわち発話者が所属している家族について述べていることになる。そして、〈私たちの〉と共通するのは、その場に構成員がいてもいなくても使えるということである。

具体例を挙げていこう。複数人の子どもをもつ母親たちの集まりで〈うちのパパが〉と話し始めたとする。ここで意味するのは、これを発話した母親の夫になるのだが、〈うちの〉を構成する家族はその場には誰もいないことになる。それでも、この〈うちの〉という言葉は〈発話者の家族の〉という意味で通じているのである。ここでは、〈うちの〉は発話者とこの場にいない、この会話では三人称で表される人物から構成されている。続いて、家庭内で父親が子どもに向かって〈うちのお母さんは〉と話し始めたとする。〈うちの〉がここで意味するのはこの父親にとっての妻であり、子どもにとっての母親である。この場では家族の構成員である父親と子どもが共通して属している〈家族の〉という意味で、父親にも子どもにも意味が通じているのである。そして、この〈うちの〉は発話者である父親と発話の対象である、つまりこの会話内では二人称で表すことができる子どもが含まれている。

これらのことから、〈うちの〉という概念は〈私たちの〉の使い方と共通性を持つことが指摘できるであろう。

以上のことから、〈うちの〉という概念が一人称複数形と共通性を持つことが分かった。そして、これらのことを踏まえて、〈うちの〉は〈私たちの〉の下位分類であるということができるだろう。ここでの下位分類とは、ある語のより限定的な意味を示すことを意味する。

この論文で言及してきた〈うちの〉という語は、〈家族の〉を意味するものである。そのため、〈家族〉以外の人物を含むことはできないのである。当たり前のことであるが、〈私たちの〉が含めるのは発話者以外の全てである。先にも述べた通り、会話内の発話の対象者（二人称の立場となる人物）を含もうが、その場にいない三人称の立場の人物を含もうが、〈私たちの〉という言葉は使うことができる。繰り返しになるが、これは〈うちの〉という言葉にも共通することである。しかし、ここからが両者の違いになるのだが、〈私たちの〉は真に〈誰でも〉含むことができるが、〈うちの〉は〈誰でも〉含むことができるものではない。これはどういったことであろうか。また当たり前のことになってしまうが、本論文中で定義している〈うちの〉は〈私〉が所属する家族以外を示すことはできないのである。自分の家族以外を含んではいけないのである。〈私たちの〉は別に〈誰を〉含んでも問題ない。既知の人物だろうと、未知の人物であろうと、不特定の誰でも、その会話が示す〈私たち〉によって含意することができる。対して〈うちの〉は自分の家族を示すときだけ使えるのである。

つまり、〈うちの〉は〈私たちの〉の限定的な使い方をするもの、下位分類であるということができるであろう。ある範囲内での〈私たち〉であるのだ。そして、ここでの範囲内というのは〈私が〉所属している〈家族〉内を意味する。〈うちの〉は「ある限定的な、家族の中の〈私たちの〉」を意味しているのである。

この章で述べてきたことについてまとめていきたい。これまで、〈うちの〉という語を〈私たちの〉という語に関連付けて特性を探ってきた。〈うちの〉は〈私たちの〉という語と共通性を持つ。それは、〈私が〉所属する複数人における所有を意味することだ。さらに、〈私たちの〉と同様、〈私〉以外の〈私たちの〉構成員は二人称の立場である人物も、三人称である人物でも構わない。しかし、ここからが両者の違いになるが、〈私た

ちの〉は〈誰でも〉含めるのに対し、〈うちの〉は〈私の〉〈家族〉以外は含むことはできない。このことから、〈うちの〉は〈私たちの〉の下位分類である、限定的な意味を持つ語であるということができるであろう。

以上で、本論は終わりになる。続く結論において、本論で述べてきたこと、そして探り当てたことについて整理したい。その中で、明快に本論の考察を示したい。

結論

Ⅰ章では、親族名称には日本語でもフランス語でも、年少者に合わせた使い方があることから、その両者には違いがあることについてまで述べた。ここから、日本語の親族名称は年長者が年少者に立場を同一化させて使うものであることを導いた。

続くⅡ章では、人類学で用いられるテクノニミーという概念に照らし合わせて、Ⅰ章で探った親族名称の変わった使われ方を、さらに詳しく定義していった。ここで、鈴木孝夫に倣って、フランス語のような親族名称の使い方をアロニミーと呼び、日本語のような親族名称の使い方をオイコニミーと呼ぶことにした。このオイコニミーが意味するのは、日本語の所有表現を伴わない親族名称は、実は〈うちの〉という語を伴っているということだ（もちろん、この所有表現は省略されているのだが）。

上記のオイコニミーという概念の、〈うちの〉という部分をⅢ章では探求していった。最終的に〈うちの〉という語は〈私たちの〉という語の下位分類であることまで探ることができた。これらを踏まえて本論の整理、そして考察のまとめをしていきたい。

これまで見てきたように、日本語の親族名称はフランス語の親族名称と比べると、年少者に立場を同一化させること、また、所有表現を伴わないことなど、特異な点がある。もちろん、フランス語においても親族名称は年少者に合わせた使い方をすることはある。しかし、立場を年少者に合わせることはしないし、一貫して誰からみた関係性であるかを示す。日本語の使い方とは異なっているのである。日本語の親族名称では、フランス語

のように所有表現を伴わない。しかし、そこには、省略されているが、〈うちの〉という表現が隠されているのだ。

この〈うちの〉という語は〈私たちの〉の限定的意味、下位分類である。〈私たちの〉という語と似たような使い方をすることがきるし、共通性を持つ。しかし、〈私たちの〉ほど広い意味を持つことはできないし、あくまで〈家族の〉という意味だけを示すものである。

以上のことから、日本語のオイコニミーには、〈家族の〉という一人称複数の限定的構成員の中で、その中の最年少者に立場を同一化させ使うという前提条件があると言えまいか。これはフランス語と比較するとより明快になるだろう。フランス語では年少者に合わせた親族名称を使う際、〈誰〉から見た関係性を示し、前提として〈ある個人の〉〈親族〉であることを示していた。対して、日本語は特に〈うちの〉ということなしにただ「お母さん」だの「おじいさん」だのと呼ぶ。これは実際には〈家族の〉という語の前提条件をもとにしているからであり、その前提条件によって所有を示さないといえるだろう。また、その前提条件には最年少者に立場を同一化させるというものも含まれている。日本語の親族名称は最年少者からみた関係性によって表されることが、原則的であるからである。

本論文では日本語の親族名称の特徴を探求してきた。探求の中でフランス語の親族名称との比較や、鈴木孝夫の提示したオイコニミーという概念との関連から詳しい特徴が挙がってきた。さらにオイコニミーの持つ〈うちの〉という概念から、日本語の親族名称の前提条件を導き出した。本論文では日本語の親族名称の用法を中心に論じたが、今後は印欧語の一つであるフランス語との対照も行いたい。そこでは、親族名称の用法において、本論文で言及したような、人類学的概念との関連や前提条件などがあるかも検討の対象となるだろう。

参考文献

松本克己 , 2010,『世界言語の人称代名詞とその系譜 — 人類言語史５万年の足

跡 —』, 東京 , 三省堂
清水芳見 , 1988,「厄介なテクノニミー」,『本』1988 年 9 月号 , 東京 , 講談社 , p.14-15
鈴木孝夫 , 1973,『ことばと文化』, 東京 , 岩波書店
—, 1998,『鈴木孝夫言語文化学ノート』, 東京 , 大修館書店